

# 富山大学 学園ニュース

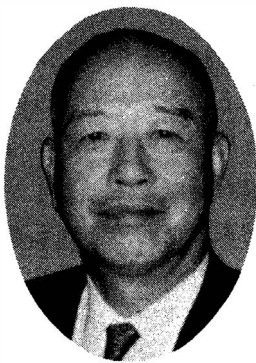
創刊号

昭和45年11月1日

編集 学園ニュース編集委員会  
発行 富山大学

## 「学園ニュース」発刊にあたって

学長 後藤秀弘

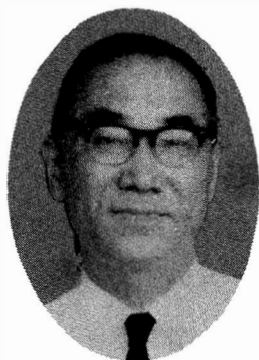


新しく広報活動が始められるにあたって、私もこれまでの経緯や本学の現況について所感を述べたいと思う。昨年、私が赴任したころの、あの異常な状況の中から、本学でも大学問題に対処するための組織——制度委員会、学生委員会、報道委員会——が設けられ、その後、長い期間、それらの委員各位が時には休日さえ返上する熱意と努力によって活動を続けられたことは、まことに感謝に堪えない。昨今では、学内も比較的平静を取り戻し、従来の組織に対しても、今後いっそう効果的に成果をあげようよう改変が望まれ、去る8月、一応これまでの組織が解散され、ここに新しく別個の形で大学改革準備委員会が設けられることとなった。制度の改革や将来の計画については、これまでも先の制度委員会で、熱心に論議が続けられてはいたが、紛争に明け暮れる状況の中では、その成果も期しがたく、僅かに一部分公表されるに止まった。もとより大学の改革、改善は単に論議の対象に止まるべきものではなく、具体案が検討され実施に向かってさらに一步前進するよう、私としては、この際切に望みたい。それはきわめて困難な課題であり、各学部、各学問分野によって事情は異なることであろうし、その点慎重な配慮が重ねられて適正に実現されていかなければならない。こうした改革準備委員会の活動とも相まって、従来とは異なる全学的な広報活動への要望もあり、ここに新しい編集委員会を設けて発足する運びとなったのである。大学問題に関する報道はもとより、常に流動する学園の姿を、全学的な、また各学部別の出来事を通して報道し、全学の意思の疎通をじゅうぶんはかってほしいものである。とかく学内紛争を拡大させる学園内の相互不信や誤解が、それによって少しでも解消され、学園の明るさが取り戻されれば幸いと思う。今日、学園は、一応正常化したかに見える。しかし、私が日ごろ心を痛めていることは、学園の明るさとはほど遠い暴力ぎだが、最近まで時折り発生していることである。静かなるべき学園において暴力行為は絶対に認めることはできない。また、大学の学問、思想の自由を守るため大学は政治的に中正でなければならぬので、学内の政治的活動も慎重にすべきである。全学諸士の自重、自覚を切に望みたい。

# 富山大学改革準備委員会の

## 発足にあたって

委員長 教授 蜷 川 栄 作



本委員会は、昭和45年7月24日の富山大学大学問題対策本部会議において同本部に関する規則廃止が決議された折に、同本部の中において富山大学の学生参加管理運営、教育研究の問題を検討していた制度委員会から提出された考え方が同

本部会議に取り上げられたことに由来するものである。同本部会議は、同本部の規則廃止によって、それまでの会議で得た結論がそのまま消えることなく、さらに発展し富山大学の改革に寄与することを願った制度委員会の希望を認められたわけである。

この大学問題対策本部に関する規則を廃止することは、昭和45年8月7日の評議会で承認された。その後各学部で委員が選出され、9月中旬には全学部からの委員が出そろい、10月5日に第1回富山大学改革準備委員会が開催され、今日に及んでいる。

委員会の性格、目的等については、先述のように本部会議の考え方をひとまず受けているわけであるが、目下のところは本委員会の名称から想定される意味の受け止め方には、多少ニューアンスに巾があるのはやむをえない。

今度、委員長をお引き受けしたのであるが、もちろん改革については全く素人であるにかかわらず、問題の重要性、困難さはひしひしと感ずるのである。富山大学の教育・研究の充実、発展に貢献するところがいよいよ大となるよう、大学の将来のため、それももっと近い将来のため、特に明日、今日のため、また1人1人の大学人のためにも、全学のえい知をまとめさせていただき、よい案を得たいと念願している。

現在のところ、学長からの要請である教養部について検討を続けることにしている。よろしく全学のかたがたのご協力を願い上げる次第である。

### 富山大学改革準備委員会委員

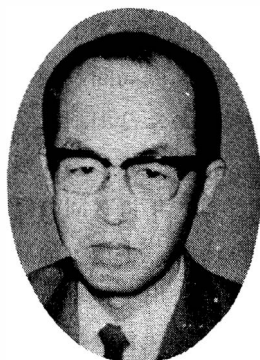
◎…委員長  
○…副委員長

文理学部	教授	田 中 専一郎	助教授	北 川 泰 司
	"	間 野 潜 龍	助 手	中 島 松 一
教育学部	"	◎ 蜷 川 栄 作	教 授	○ 四 谷 平 治
	"	坂 井 誠 一	助教授	宮 下 尚
	助教授	増 田 欣	助 手	能 登 谷 久 公
経済学部	"	岩 渕 富 治	教 授	柿 岡 時 正
	"	大 谷 明 夫	"	林 良 二
	"	吉 原 節 夫	助教授	鎌 田 邦 夫
薬 学 部	教 授	渡 辺 和 夫		奥 貫 晴 弘

# 再 建 の 指 標



経済学部長 教授 新 田 隆 信



わたくしは、このたび経済学部の世話役として学部長に就任した。学問を愛し真理を慕い求める知識共同体の一員として、またうら若く希望に燃える学生諸君の先達として、この機会に所懐の一端を申しのべ、大方のご理解を得たいと考える。

あたかも紛争のあらしが一応鎮まって、荒廃のあとに再建の槌音がひびき渡ろうとする今の時を、反省と再出発の契機にしたいとおもう。ほとんど全国一円に吹きあれた大学紛争は、一体なにを意味し、なにをもたらしたか。見る人により感ずる心により、見解は様々に分れようが、共通の認識としては大学が改革されねばならないということであろう。

科学が驚異的な発達を続け技術が急激に革新されて行く現実社会にたいし、大学の体質がこれに適應する能力を示さず、化石に近い特権的管理体制に自足したことも、紛争をよぶ大きな原因であったに違いない。闘争は激烈にすぎた嫌いがあるとはいえ、大学の使命、大学における研究と教育の在り方、大学自治の本質が問われ、それらの実態と課題が浮き彫りにされたことは、それなりの意義を伴うものであった。紛争の苦悩のなかで、教官も学生も、利己的保身の殻を去り、謙虚にして大胆な自己変革を志した努力は、評価されてよい。かくて改たむべき点は勇氣をもって変えるとともに、堅持さるべき不易の部分には冷静かつ沈毅に擁護しなければならない。変革すべきものと、すべからざるものとを、明確に識別する英知が今日ほど希求されることはない。大学改革は現代社会の課題となった。長期的展望と短期的検討を併せ、古典的大学観と現代的価値観を調整し、大学人の良識を結集することが必要である。

紛争の原因は大学により学部によって異なるが、経済学部の場合は教官人事をめぐる紛糾し、ついに大事に至る経過をたどった。そのため少壮有為の学究が他へ流出し、学部は教官構成の面で大きな損失を蒙っ

た。学部としては、客観的に公正かつ的確な人事を担保しうよう、国家法と全学的基準を補完する内規を設け、人事の自治権の適正な運用を期している。この精神と原則のもとに、教官の充足と充実をはかり、学部再建の礎を固めることは、わたくしに課せられた焦眉の責務である。大学自治制の本旨は、自律的法治社会の維持と発展に存する。自治のルールに従う厳格な自己抑制の道徳的訓練こそ、自治制を支える柱である。秩序を尊重し節度を弁まえ、研究と教育の本務に専念することは、大学人の基本的姿勢にほかならない。研究と教育の活動を、合理的効率的に遂行するためには、管理運営面での改善が工夫されてよい。それには教育と研究の主役たる教官各自の主体的判断が尊重されなければならない。巷間ときに大学の管理運営を研究教育の領域から分離し、技術的に処理すべしと説く発想も紹介されるが、かえって具体性を見失う惧れがあることを指摘したい。なお本学部では、学生諸君の要望により、教官と学生との二者協議会が生まれた。学生諸君が何らかの形でその意見を集約し反映させることによって大学自治にたいする間接的参加の路線を確保する体制は、今や時代の要求である。ゼミナール制度と相まって二者協を活用し、話し合いの門戸をひろく開いて、学部の合理的運営につとめたい。同時に職員各位の意思を汲む方法も考慮して行きたい。

わたくしは、滞欧中パリを四たび訪れた。そのつどカルチエ・ラタンのソルボンヌ大学を見た。例の五月騒動のあと、ド・ゴール大統領の意を体してフォール文相は大学改革の骨子を発表した。すでに立法化を経たその方式では、鳴物入りの学生参加は、きびしい制約の上で認められるにとどまった。大学周辺の風物詩は平和かつ静穏な調べをたたえ、マロニエの葉かげもあざやかで、はげしいデモ闘争の名残りはほとんど感ぜられない。ヨーロッパの大学は、ちょうど名利をかこむ門前町のように、校舎に並んで民家や商店が建っており、広大なキャンパスに一郭を画する例があまり見当たらない。そのことも学生運動が過熱しない一因であろうかと思われる。ヨーロッパの大学生は、数が少なく出身の階層も一定しているためか、挙指も端正

であり、よく勉強する。オクスフォード、ケンブリッジ、ロンドンの各大学の桁外れた図書館で読書に精出す学生諸君の輝くまなざしは、学問の真理にコミットする往昔の敬けんな修道僧を連想させる。環境はあくまで静ひつ、思索に最適である。アメリカの場合は広漠はてない大陸を扼するだけあって、さすがに宏壮な土地や建物が目立ち、マンモス大学の出現もうなずかれる。アメリカでは同齡者の3分の1が大学に入るといわれるが、学習の基準が厳重で、ぶじ卒業できるのは入学生の3分の1にすぎない。アメリカについて世界第2位を占める日本は、4分の1の大学進学率をほこるとともに、ほとんど全員が卒業できる仕組みであるから、学士号を授与された大学卒業生の供給国としては、まさに世界一である。この点にも問題を感じるが、今はふれない。

総合大学は、学部自治を基礎として運営される。これは西欧やアメリカに共通の準則である。学部は、分科大学つまりコレッジ（アメリカ式の発音ではカレッジ）である。学生数の最適規模とか個別指導制（テュ

ートリアル・システム）とかをふまえ、コレッジ中心の大学運営が再び脚光を浴びるのではあるまいか。わが国で大学法制が細部規定を欠く事実も、大学側の自主決定を期待し、自治領域をひろく認める法意と解される。

本学部は、戦後の新制大学たる富山大学の1学部であるが、戦前の第13高商だった旧高岡高商の後身として位置づけられる。戦前と戦後にあたり旧制大学に昇格した3高商（東京・神戸・名古屋）を除いて、残りの旧制10高商を前身とする10大学は、年に2回の経済学部長会議を開いている。10大学とは、小樽・福島・横浜・富山・滋賀・和歌山・山口・香川・長崎・大分の各大学をいう。他の9大学は2学科（ないし3学科）編成であるが、富山だけは1学科のままである。人的陣容をととのえ、体制を整備して、他大学なみの2学科制に漕ぎつけるよう力を尽したい。清新発刺たる伝統的学風を再建の基底にすえ、社会科学を対象とする唯一の学部として、富山大学における歴史的役割と社会的任務を果たすべく念じている。

## 《工学部から》

### 特別講演会の案内

工学部では、最近の金属材料界の進歩発展の現況に鑑み、前金属材料技術研究所所長 橋本宇一博士を高岡にお迎えし、特別講演会を開催することとなった。次第は下記のようにあり、関係各位のご参加を希望したい。

#### 記

- 1.日時および場所：昭和45年11月7日(土)、午前9時30分から、工学部8番教室において。
- 2.演題：欧米における金属材料および材料研究の現状（宇宙溶接、原子力製鉄、ウラン原子撮影などのトピックスの解説も含まれる。）
- 3.講師：科学技術庁金属材料技術研究所 前所長・客員 理学博士 橋本宇一氏
- 4.主催：富山大学工学部・北陸信越工業教育協会富山県支部

## 《薬学部から》

### 公害問題シリーズ講演会案内

現下公害問題が特に喧しく社会問題として大きくクローズアップされている。特に公害県での実態を把握しておくことは身近な問題として極めて大事で、その状況を黒部、神岡の現地調査を基にして実態を明らかにしようと、報告者などを招いて講演会を開催します。医薬衛生研究会（学生）が主催し、10月3日(土)から隔週にわたって薬学部第4講義室で行ないます。

#### ●第1シリーズ

「公害（イタイイタイ病）の実態（裁判を含む）を告発する」

第1回：10月3日(土) 弁護士 木沢進氏の講演

第2回：新聞記者(北日本、富山)による取材報告(11月の予定)

この間に研究会員の現地視察見学も予定している。

第3回、第4回は追って案内する。

#### ●第2シリーズ

「公害問題と科学者の意見」

#### ●第3シリーズ

「公害をなくすために」

以上各シリーズをそれぞれに何回か重ねて、真の実態を把握し説明するために長期的なものとし、明年にかけて続行するものです。奮ってご参加ください。

# 昭和45年度後期授業日程（予定）

学部	年次	授業日程	冬季休業	学部	年次	授業日程	冬季休業	
文理学部 文学科	3・4	10月19日～2月20日	12月20日～1月10日	経済学部	3	1月20日～5月12日	12月28日～1月2日	
		11月13日時間割発表・11月17日開始の見込	11月17日開始の見込		2	11月16日～3月13日		
	理学科	4	11月4日～3月6日	12月23日～1月10日	薬学部	4	卒論・実験	12月28日～1月9日
		3	12月8日～5月8日	12月27日～1月10日		3	11月9日～3月16日	
2	11月13日時間割発表・11月17日開始の見込	12月27日～1月10日	2	11月9日～3月16日				
教育学部	3・4	10月19日～3月4日 (教育実習2.15～3.4)	12月27日～1月10日	工学部	4	10月19日～3月10日	12月20日～1月10日	
		11月9日～3月6日	12月27日～1月10日		3	11月2日～3月13日	12月27日～1月10日	
経済学部	4	11月24日～3月13日	12月29日～1月2日		教養部	1	11月16日～3月20日	12月27日～1月10日
		(前期 9月21日～1月19日)	12月29日～1月2日					

## +++++ 芸 交 祭 近 づ く +++++

北陸3県大学学生交歓芸術祭は、今年で20回目、ついに成人となり、われわれの耳にはもう芸交祭の名がなじみ深くしみついてしまった。今回は富山大学が当番で、11月21日(土)、22日(日)、23日(月)の3日間を主に、次のとおりの参加大学が、14部門にそれぞれ富山市内の各会場に分かれて日ごろの成果を発表する。

参加大学 福井大学、金沢大学、富山大学、金沢美術工芸大学、金沢女子短期大学、北陸学院短期大学、大谷技術短期大学、富山女子短期大学、仁愛女子短期大学、福井女子短期大学、金沢工業大学、金沢経済大学、（注一福井工業大学は今回に限り不参加）

さらに中央企画として、次の行事が実施される。

### ○全体開会式・講演会・映画会

期日 11月21日(土) 会場 富山市公会堂

テーマ：「われわれにとってサークルはいかなるもの

のとしてあるか。サークルで何をみぞすのか。」

「いかなるものとして芸術活動に携わってゆくのか。」

時間 午前11時～正午 全体開会式

正午～午後4時 講演会

講師 梅沢謙三氏 坂崎乙郎氏（予定）

午後4時～6時 映画会（入場料200円）

### ○シンポジウム

期日 11月23日(月) 会場 富山大学教養部4番教室

テーマ 講演会と同じ

時間 午前11時～午後2時

### ○交歓会

期日 11月23日(月) 会場 富山大学内

時間 午後2時～6時

模擬店、フォークソングの集い、フォークダンス、ファイヤーストーム（雨天の時は屋内で行わない、ファイヤーストームは中止）

### ○ダンスパーティー

期日 11月23日(月) 会場 富山県民会館

時間 午後6時～9時 入場料 200円

部 門 別	会 場	期 日
演 劇	富山県民会館	11月18日(水)、19日(木)
放 送 劇	富山大学学生会館集会室No.1, 4	22日(日)
映 画	富山大学学生会館集会室No.2 教養部教室	22日(日)
落 語	富山大学学生会館大集会室	22日(日)
管 弦 楽	富山市公会堂	20日(金)
軽 音 楽	富山市公会堂	24日(火)
ギター・マンドリン	電気ビル	21日(土)
合 唱	富山市公会堂	20日(金)
邦 楽	富山大学学生会館大集会室	22日(日)
文 学	富山大学黒田講堂貴賓室	22日(日)
茶 道	美術クラブ、佐藤美術館、佐伯宗義別邸	22日(日)
美 術	富山市商工奨励館	21日(土)、22日(日)、23日(月)
写 真	富山市商工奨励館	21日(土)、22日(日)、23日(月)
書 道	富山市郷土博物館	21日(土)、22日(日)、23日(月)

## 〈あとがき〉

「学園ニュース」創刊号の発行だからといって、編集方針など書き列ねたところで、哀れな自己弁護になってしまうのがオチであろう。いろいろとお題目を掲げたところで、現実には常に裏切ろうと待機しているし、事実その徴候らしきものすら見えているように思われもする。まして、新聞学をやったわけでもなく、ジャーナリズムの仕事に従事したこともない者どもの寄り集りが、むしろ押しつけられたような形で編集をするのだから——すでに自己弁護が始まっている！——たかが知れている。

それなのに、いくばくかの力をさくのはなぜなのでしょう。

私たちは富山大学をよりよい大学にしていきたいと願望する。それをみとすために、いわゆる学校側はどのような努力をしているのかを、知りたいと思う。また知ったことを知らせたいと思う。それがあつて意味では真の協力にも通じるとも考えている。

従来の富山大学と新しい富山大学との間には、当然のことながら、差があるはずである。その差を踏み越えていくには、緊張感とか抵抗感が伴うであろう。そうした緊張感やら抵抗感がなかったならば、文化の進展は望みえないであろう。

改革は、たとえ小さなものであつても、大きな努力が必要であろう。富山大学をよりよくするというこのためには、きわめて大きな努力が長期にわたつて続けられなければならないであろう。時には足踏みをしているように見えるかも知れない。しかし、もしそれ

が次の前進に役立つなら、それでもよからう。私たちはその状況を伝えることになるであろう。特に富山大学改革準備委員会の努力は全学的に期待されており、伝えうる限り伝えたいと思っている。

この編集委員会は私的な集りではなく、公的なものではあるが、事実を知り、かつ知らせようとする私たちの建設的意志と努力が、拘束されるに至るならば、委員たることを返上しようと思つている。

何とか創刊号の編集を終えたが、第1号ということから肩を張つたものになつてしまった。次号からは、もっとニュース的なものを取り入れ、楽しく明るいものにしたいと思つている。

### 富山大学学園ニュース編集委員会委員

◎…委員長

文理学部	助教授	堀	令司
教育学部	〃	大塚	恵一
経済学部	講師	山口	素光
薬学部	教授	森田	直賢
工学部	〃	沢島	恭
教養部	◎	〃	小森 典



印刷 巧 舎 会